

## 平成 23(2011)年度「NGO 長期スタディ・プログラム」最終報告書記載項目

提出日：2012年3月15日

氏名：石塚 彩 (いしづか あや)

所属団体：特定非営利活動法人 日本リザルツ

受入先機関名(所在国)：シグノー国立結核療養所 (ハイチ)

研修期間(全体)：2011年10月19日～2012年03月06日

研修テーマ：

現地での NGO や医療機関を通して復興支援プログラムに参加し、感染症(とくに結核/結核とエイズの二重感染(TB/HIV)や多剤耐性菌結核(MDR-TB))対策の現状、及び大地震による保健システムへの影響など現地状況を十分に把握する。また、その調査結果をもとに、現地ニーズに応える今後の支援プログラムの参考とする。

全体研修目標：

現地の状況を把握するとともにネットワーク構築のノウハウを学ぶ。また、途上国の結核対策と支援のノウハウを学ぶ

具体的な研修内容：

研修指導員(須藤昭子シスター・医師)のもと、受け入れ先機関であるシグノー結核療養所の現状を把握する。具体的には、病院内実務研修を行い、医療と運営の場に携わる。また、結核患者の検査データ管理を行うことと、病院再建の復興支援事業にも携わる。

さらに、シグノー結核療養所だけではなく、保健局や他の医療機関を訪問し、ハイチ国家結核対策の現状の TB/HIV 二重感染問題や、多剤耐性結核菌問題を把握する。

これらの活動を通して、ハイチ国政府機関、国際機関や NGO とのネットワーク構築を行う。

研修の成果：

(※目標に対し達成できなかった内容がある場合は、その理由とあわせて報告してください)

シグノー結核療養所の現状は、一から学んだ。例えば、シグノー結核療養所は、国立機関であり、医師は国が派遣して給料を払っているが、運営は、聖テレサの会の修道院のシスターたちに委託されており、事務手続きは主にシスターたちが行っている。また、結核患者は国に派遣された医師に診てもらっているが、エイズとの二重感染者は GHESKIO という大きな医療 NGO の医師に診てもらっている。このような複雑な仕組みが出来上がっているのは、シグノー結核療養所は国の結核センターということで、国を通して世界基金から抗結核薬を入手しているが、抗エイズ薬はエイズ患者を診る団体である GHESKIO が PEPFAR の資金で入手していることであるからである。国際保健分野の資金先により、このような縦割りの結果となって、同じシグノー結核療養所内でも、疾患別によって違う団体が治療を提供する現状となっている。

また、病院の再建には、結核病棟は日本政府が資金を提供するほか、一般病棟の再建はイタリアの NGO「InterSOS」、入院病棟が建設されるまで使用する仮設病棟はスイス赤十字社、そして病院施設内の学校はプエルトリコからの資金で建設されること、多くの政府・団体からの援助で再建が進んでいる。これら

援助団体との調整は、事務長のシスター・エビリンが行っており、政府からの人間が実際に現場で調整している様子は一度も見られなかった。これらの現状を把握することによって、途上国での援助は縦割りで難しいということ、また政府の人間、特に国レベルの者は、あまり積極的に医療の現場に関わっていないことの典型的な例を把握し、途上国の一般的な難題を理解するための参考になった。

このような現状の中、指導員の須藤先生は、30年以上も当病院で結核対策に携わり、シグノー結核療養所で当初は薬も提供できず、社会から見捨てられた患者が死んでいくだけであった施設から国内で最も優れている公的結核センターへと変えた人物である。彼女の日頃の人々の関わりを見ているだけで、現地の人に寄り添うこととは、効果的な援助とは、また効果的ではない援助とはどういうものであるか、彼女の成功例と失敗例から学んだ。

例えば、須藤先生が現地の人をたてる支援の在り方は、とても良い参考例であろう。現地人の自立性とプロジェクトの持続性を重視した援助を理想としている須藤先生は、あまり自分を前に出すことなく、主導権は現地の人に持たせて事業を行っている。だが、世界保健機関や日本大使館など援助先とのパイプ役、もしくは調整役を務め、温かく影から事業の成功を見守っているようである。彼女は、現地の人々の声となって、世界へ発信するため、頻りに首都のポルトープランスへ足を運び、あちらこちらへ助けを求めていた。

また、現地の人に寄り添い、分かち合うことが、現地の人々の本音を聞き、彼らの声となるための信頼関係を築きあうためにどれほど重要であるか知らされた。毎日病院へ足を運び、患者や従業員一人一人に声をかけていく彼女は、周りの方全員から愛されていた。ほかの援助団体の人は、多くて週1回、目的地の建物に車でできるだけ近くまで行き、病院の施設を歩き回ることもあまりないまま、建物に出入りして、数分で訪問を終えるばかりで、彼ら行動からして、いかに「ビジネスライク」であるか伝わるものであった。それに比べ、須藤先生は、じっくりと時間をかけて、それぞれの人に声をかけてから、仕事を行っていた。このような彼女の姿は見習うべきことが多かった。

また、上記のように須藤先生が手厚く関わっているからこそ、日本政府も安心して当病院へ援助ができてきたのであろう。

だが、その援助で、まさに失敗例もある。例えば、現在、シグノー結核療養所では、壊れたままのレントゲン写真器が置いてあり、数少ない地震の影響がなかった建物の1室をとっているのである。一昨年寄付されたばかりであるというのに、扱いが悪かったのであろうか、既に壊れて、そのままである。日本とは違い、高度な技術を習得している人は少なく、高度な医療機器が寄付されても、壊れても修理する人がいないため、レントゲン写真器は場所をとる大きなゴミとなっている。また、無償・無料で物資提供をすると、物の価値が伝わらず、大事にしないという問題があることなども、彼女の過去の経験からの教訓も教えていただいた。どんなに飢えていて、貧しい人々にでも、無理のない範囲で、何か支払っていただくようにしていただかなければ、乱暴に扱われ、無駄になってしまう、ということである。

だからであろうか、食糧に関しては外部に頼らず、現地の人々が自らものづくりの苦労を経験し、作物の価値を理解していただくこと、畑を敷地内に設けてもいる。結核は貧困の病といわれているよう、貧しい人々の栄養失調や食糧問題と絡んでいる。だからこそ、治療中の患者が、薬を飲むだけでなく、しっかりと栄養を付けることも大事であるのだが、世界基金や政府のお金では、食糧のための予算が確保されていない。そのため、患者への食糧は、長年修道院の寄付に頼ってきたが、近年須藤先生は、病院が自給自給できるように、病院に畑を作り、またタンパク質のために鶏や牛などの家畜を飼い、患者に食事を提供している。もちろん、畑の規模は小さいので、100%自給自足しているわけではないが、この事業を通して、自立性と継続性を見通した事業の重要性を改めて実感した。

須藤先生の援助の在り方の考えや姿勢を学んだあと、私は、シグノー結核療養所と援助団体との連携調整役を務めた。草の根資金で建設予定の結核入院病棟の事業コスト削減、また日本の国益のためにもハイチにPKOとして派遣されている自衛隊に整地をお願いすることになり、在ハイチ日本大使館そして自衛隊と現地関係との連携調整を行い、国連(PKO)と連携を持つことに関して学んだ。ハイチは、自国の軍隊がなく、平和構築・安全管理や復旧復興に国連PKOの存在に頼っている一方、住民は複雑な思いがあるので、PK

〇という形を通しての日本政府の貢献の仕方が住民にとってありがたくもあり複雑なものであることを学んだ上で、国連というマルチラテラルと日本政府というバイラテラルの援助の調整を行った。その際には、大使館と自衛隊との連絡など事務的作業は主に私が行ったが、現地関係者の意思を尊重し、決断などに関する主導権は、すべて現地関係者にあること、また現地関係者が私の意思を認識していることを明確にしなが、活動に携わった。どれほど現地の人たちの声になれるか、彼らの意思をうまく日本の自衛隊・大使館へ伝えられるか、援助国の者として現地の人に上から目線の圧力をかけていないか、色々考慮した。また、同じような態度を自衛隊に求めたが、自衛隊は自衛隊のやり方があり、一方的なところがあったため、現地関係者に自衛隊の善の意図を勘違いさせないよう、工夫するのに苦労したが、結果的には、現地に寄り添って行う連携調整がどれほど困難であるか理解するための良い経験となった。

なお、結核患者の検査結果及び治療結果データ収集も滞在期間中に順調に進み、また、新しく導入された検査法と従来法との結果の比較も終え、データは現地と共用した。その際に、データから見えてくる改善案など提案する機会が病院関係者とハイチ結核対策プログラム関係者と設けられ、今後のハイチの結核対策へ大きく貢献できた。

さらに、滞在期間に様々な保健分野のプレイヤーやハイチの結核対策に携わっているキーパーソンズ(保健省副大臣、世界保健機関ハイチ事務所、世界基金のエイズと結核プログラム担当者、シグノー国立結核療養所のスタッフ、GHESKIO エイズ研究所、首都内の結核小児病院、エイズ・結核センターなど)と面談し、ハイチ結核対策の情報収集をした。そのため、それぞれの関係と役割が把握できたうえに、5か月間という期間中に信頼関係も築き上げられた。医療政策への影響力に関する彼らの位置づけやパワーバランスなども把握できたため、この情報は、今後、リザルツの主な活動である結核対策のアドボカシーに大いに活用できることとなる。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法：

「研修の成果」の最後に述べたように、リザルツの主な活動である結核対策のアドボカシーに、本研修の成果は多く活用されることになる。まず、本研修を通して現地の人々の声を反映することとはどういうことか学べた上、人々に寄り添う心及び彼らの声を世界に届けることの重要性を強く感じる事ができた研修となった。これは、ハイチ国の結核対策の活動だけでなく、貧困対策のアドボカシーを行う団体の一員として、大変重要な視点を得ることができた。

なお、ハイチ国特有なことに関しては、現地政府関係者だけではなく、在ハイチ世界基金関係者や世界保健機関関係者と知り合うことができたため、今後のハイチ結核対策のアドボカシー活動に多に有利となるネットワーク構築ができた。

さらに、日本リザルツは、ハイチにて新しい結核診断法を導入する事業を行っており、現地関係者との連携をとるための関係構築の基盤が、本研修を通して得られた。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等：

5か月間という長期間に、実のある研修の機会を与您いただき大変感謝している。今後も、本研修が継続し、より多くのNGO職員がこのような機会を通して成長する場を提供していただきたいと思う。

なお、ハイチ国というセキュリティーの面で慎重でなければいけない国では、月26万円という日当・生活手当では、生活が大変厳しいと思われる。幸い、私は、指導員の須藤シスターのご厚意で修道院に宿泊させていただいたため、26万円で問題なく生活できたが、通常では無理であろう。須藤先生の施設では、既に修道院の従業員として雇われているガードマンなどがいるため、セキュリティーのための負担額など払わずに済んだが、通常は、セキュリティー代も考慮して宿泊費を払うことになり、高額な経費になる。また、車移動も少なくともどまる生活を送ったが、通常は、交通機関での移動は勧めておらず、一日150ドル以上かかる車両・運転手を借り上げて移動しなければならない

けない国である。このような国で、月26万円の日当・生活費を再検討していただくことで、より有意義な研修成果を得ることができると思う。

その他：

（総合的に研修成果を理解するために、写真類、スタディ員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、あわせて添付願います）



ハイチ大震災から2年後も大統領府は半壊のままであり、その周りのテント村で人々は今も生活している。



世界保健機関ハイチ事務所を訪問

右から：ハイチ国家結核対策プログラム代表 リチャード・ドメザ医師、世界保健機関ハイチ事務所結核担当 インヂール医師、長期スタディ研修生 石塚彩、結核予防会研究所名誉所長 森亨医師



研修受入機関であったシグノー結核療養所は、震災後全壊し、再建のためにいくつかの国の支援が同時に入り、縦割りの援助を現地機関はうまく調整しなければいけない。



2011年12月まで約2年間、シグノー結核療養所の入院患者はテント内で治療を受けていた。研修指導員の須藤先生と入院患者。



スイス赤十字社の寄付により、2011年12月後半シグノー結核療養所に仮設病棟が完成した。仮設病棟は3人部屋、プライバシーと衛生が保たれ、患者たちは大変喜んでいた



草の根資金シグノー結核療養所再建プロジェクトの署名式（2011年11月4日）  
在ハイチ日本大使館にて、南健太郎大使とシグノー結核療養所事務長シスター・エビリン



2012年1月4日から13日、MINUSTAH（ハイチ PKO）に所属している日本の自衛隊がシグノー結核病棟建設予定地の整地を行っている様子。



研修指導員の須藤先生とシグノー結核療養所の炊事場の女性たちが昼食の準備をしている様子。

以上